

ホトトギス

八月号

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日発刊
今和五年八月一日発行
第一四一十六巻第八号



風雅の小筥 〔六十六〕

廣太郎

平成十八年九月四日に東京駅、丸ビル隣の「三菱ビル」で営業を始め、結局このビルを最後に丸の内から移転する事になるのだが、考えてみるとこの文をお読みになるのが令和五年、つまり二〇二三年という事になり、ホトトギス社が、当時ホトトギス発行所として初めて丸の内の丸ビルで営業を始めたのが大正十二年でこの年は一九二三年になり丁度百年という事になる。つまりあと五年丸の内にホトトギス社があれば、百年同じ丸の内
で営業を続けていた事になるが、まあこれも縁だろう。

この三菱ビルの部屋は十階の一〇七四区という部屋番号であった。実はこの番号を聞いて稲畑汀子が結構喜んでいた記憶がある。それは他愛もない事で、汀子邸のある兵庫県芦屋市平田町の郵便番号の下四桁が「〇七四」なのである。つまり最後の三桁が「〇七四」と同じで覚えやすいというのだ。何か仄々と聞いていた記憶がある。又このビルは十五階建てで、ホトトギス社が入っていた頃の丸ビルが九階建てであった事を考えると、結構大きいビルの印象がある。低層部分で繋がっている皇居側の隣には、現在丸の内二丁目ビルという名称になったと思うが、以前は三菱重工の本社があったビルがあり、このビルで爆破事件があったのを御記憶の方もおられるのではないだろうか。調べてみると昭和四十九年八月三十日、ホトトギス昭和四十九年九月号の年尾消息で、結構詳しく触れられている。私は六甲山の山荘のテレビでニュースを見ていた記憶があるが、その時はこんな身近にこのビルの存在を知るとは思ってはいなかった。

旬日記 廣太郎

令和四年八月三日 NHK文化センター

天守舞ふ夏蝶城を守るかに
天帝の最後の足掻き街晩夏
福音書繙いてより夜の秋
鵜飼果て闇星空へ明け渡す

八月四日 蕉心会

雷鳴に大江戸の空縮みゆく
通し鴨すつかり池の主顔
松涼し鴉を一羽侍らせて
天命を謳歌してゐる蟬時雨
ハライソを垣間見せたるはたがみ
大白雨池の表情豹変す
弥太郎の一喝めきてはたたがみ

八月五日 カトリック新聞選者吟

上げ潮となりて大川秋近し

八月五日 「俳壇」結社主宰競詠

夜の秋ビシソワーズの香り立つ
鯖鮮に始まる古都の宴かな
日盛や昼のカレーは極辛で

喘ぎ来て冷素麺の屋下り
コンサート果てウインナーシュニッツェル

八月六日 鬼貫顕彰俳句大会

遺されし庭に化身の如き蛇

八月七日 野分会吾屋例会

送行に大本山の孤高なる
三井の鐘解夏の音階ありにけり
順境も逆境も越え夏明かな

八月七日 青嵐会吾屋例会

惑ひ箸びたりと止まる新豆腐
人生の不思議しみじみ門火焚く
新豆腐つるりと君の肌触り
新しく加はる君に門火焚く
たましひの叫びに揺らぐ門火かな

八月八日 朝日カルチャー若草句会

蛸や三瓶の朝塗り替へて
左手に酒右手には西瓜提げ
蛸や六甲の稜線凹ませて
蛸に山気靈気となり暮るる
八月九日 大阪倶楽部出句
新豆腐喉通りゆく刹那かな

ホ句の秋しみみ語り為人
新豆腐角に気品のありにけり
降り続く雨に佇む窓の秋
薬味にも蘊蓄ありて新豆腐

八月十一日 十筆会

黄門の田より新涼立ち上る
その中に一人加へて墓参
姉となる孫のはにかみ鳳仙花
鳳仙花羽音に色を明かしゆく
鯉跳ねて新涼の風生まれゆく
新涼に突つ込むジェットコースター

八月十一日 芭蕉祭出句

伊賀と江戸繋ぐ緑や時雨虹
八月十五日 北國文芸選者吟

新涼を背ナに園丁黙々と

八月十八日 登高会

大文字草石垣を画布として
迎火の火色に君の気配かな
大文字草苾にある憂ひかな
迎火を焚いて悌引き寄せる
迎火や黄泉の扉を開きゆく

解夏の僧バイクに袈裟を靡かせて
八月十九日 廣邦会

新涼の風に誘はれ逝きし君
蒼天におしろい楽を奏でゆく

八月二十三日 有恒俳句会選者吟

木槿垣無住の家の華やぎに
底紅の底に秘めたる明日かな
走馬灯闇を回してをりにけり
木槿垣この家更地となる運命
天翔る馬を侍らせ走馬灯

八月二十三日 若水句会選者吟

ローム層宥め大根蒔きにけり
又一人連れられて逝く初秋かな
悌は何時か失せゆき星流れ

八月二十四日 目黒学園句会

初嵐磨いてゆきしまリア像
かなかなに暮れゆく空の真くれなゐ
蝸の声に漣生まれゆく
洞むより明日を夢見てゐる木槿
シスターのべール靡かせ初嵐

八月二十五日 徳源寺句会

三瓶野の空を画布とし星月夜
法師蟬レクイエムめく墓前かな

八月二十八日 青嵐会東京例会選者吟

新涼の風名園の黙を解く
為人供華を集めて墓参
蒼天を掃き新涼の風となる
星一つ消えゆく先の霊迎
大文字草は大志を抱き咲く

八月二十八日 野分会東京例会

山門の朱色褪せたる夏明かな
彦星となられし小川龍雄さん
送行や梵鐘の音くぐもれり
地下街に消えてゆきたる解夏の僧
一塊の雲織姫を攫ひゆく

八月二十九日 石川多歌司様表彰祝

新涼の近江へ繋ぐ祝ぎ心
八月三十日 悼小川龍雄様

師の許へ独り野分に送られて
八月三十日 カトリック新聞選者吟

星今宵君の悌限りなく

八月三十一日 夢三忌全国俳句大会前日句会

秋の蟬大正ロマンめく響き
新涼の風水音に躓ける

雑詠 廣太郎 選

卒寿とは徒ならぬ数福の豆 相模原 木村享史
 はばかり生きて卒寿や山笑ふ 同 同
 卒寿より踏み出す一步春風裡 同 同
 花早く咲きても汀子師は在さず 長岡 安原 葉
 雛の間に泊りし邸の思ひ出も 同 同
 疎開てふかなしき世知る古雛 同 同
 千本の梅天守へと香を上ぐる 大阪 徳岡美祢子
 太閤の城より春となる浪花 同 同
 城見船分けゆく濠の水温む 同 同
 舞ひ降りて来る鳥ばかり湖小春 静岡 須藤常央
 鰯起し日本海を熱くして 同 同
 拝むには昇り過ぎたる初日かな 同 同
 四年振りてふ言ひ訳の花見酒 大阪 酒井湧水
 機嫌よくアンパンマンと花の宴 同 同
 花見船サンバ飛び出すデッキ席 同 同
 紅を一瞬引いて椿落つ 袋井 湖東紀子
 藪椿藪の暗さを脱いで落つ 同 同
 枝先の溶け出しさうな花曇 同 同

黄塵の空天日の影を置き 龍ヶ崎 今橋眞理子
 花心用意なきまま満開に 同 同
 雨の糸花に織り成し降りつづく 同 同
 鴨眠る旅立ちの日を近くして 加須 岡安紀元
 日輪の食ひ残したる斑雪かな 同 同
 春昼の自墮落といふ大欠伸 同 同
 知らぬ間に過ぎし後厄春立てり 渋川 木暮陶句郎
 弟子ひとり増え陶房の水温む 同 同
 木の芽晴いつも空とは新しく 同 同
 花屑を浮かべるための水路とも 京都 山崎貴子
 帆柱を休めて浜の日永かな 同 同
 待ちかねし人も桜も溢れ出る 同 同
 ふらここに日向の温み残りをり 高松 永森ケイ子
 ふらここを漕ぐ夕風と影ひとり 同 同
 ふらここやひとりぼつちになる世界 同 同
 虚子の浜実朝の海若布干す 東京 田丸千種
 紅椿もう落ちさうに蕾解く 同 同
 船来れば隠るる小島椿東風 同 同
 師の館の最後の二月礼者とし 神戸 山田佳乃
 幾年を通ひ来し門梅二月 同 同
 ひとつぶの言葉を抱く木の芽かな 同 同
 けふの命けふを満して花万朶 同 同
 みな染る桜に触れて来し風に 同 同
 和 田 華 凜
 ずいと来てささとすすめる花見酒 同 同

雑詠句評（七月号より）

汀子忌や十七音にある祈り 神戸 涌羅由美

汀子先生が昨年（二月二十七日）に亡くなられてもう一年が過ぎ、思い出だけがますます蘇る。この二月二十七日に、虚子記念文学館において汀子忌の俳句会が行われ、俳句会をすることに よって先生をお偲びしたものである。先生は何よりも俳句会が大好きであった。駅での電車の待ち時間が長い時に、ナプキンを割いて俳句会をしたことを思い出している。それほど俳句の好きな先生へは俳句を作り、俳句会をすることが先生への一番の偲ぶ心であり、まさしく十七音が先生への祈りなのだ。もつと教えて戴きたかったとの思いが募るばかりである。（むつみ）

稲畑汀子が亡くなり、汀子忌が季題として定着しつつある。そんな中追悼句会が行われた。汀子と同じくカトリックの信仰を深く持つ作者の、俳句を祈りとも思う優しい心に満ち溢れている。正にこの季題に相応しい句である。（廣太郎）

句碑も生れ遺愛の雛も在す館 西宮 本郷桂子

いうまでもなく虚子記念館の三代句碑のことで、「遺愛の雛」と取りあわせることで、心からの句碑建立への祝意と、亡き師への追慕が、しみじみと伝わってくる。「遺愛の雛」に亡き師の面影を見るところが、いかにもいじらしく切ない。切ないと言わずに切なさを出したところに、俳句らしい抑制と豊かさがある。「句碑も「雛も」と「も」を重ねつつ、切々と亡き師に問いかける、心のこもった「存問」の一句である。（中正）

芦屋の虚子記念文学館の桂の記念樹の下に虚子、年尾、汀子の三代句碑が建立された。そして、汀子邸にあった汀子遺愛の次郎左衛門雛は、邸から文学館に移された。事実を素直に表現して未来の明るさが伝わってくる。（廣太郎）

ありし日のあの方思ふひひなかな 神戸 和田華凜

雛は人形、とすれば人が思われるのは順当なことと思われるけれど、実際のところ雛は誰にも似ないようにならなくては、それが雛らしくもあり、多くの人に愛される雛の持つべき特徴でもある。では、誰か、どうしてか。たしかに雛のようなところのあった汀子先生か、「ヒナ」をその名にもつ祖父のことか、雛の日に亡くなった先達か、あるいは…。長い過去をもちながら今、さま

さまの人を思う雛。(敦子)

ひよっとして、同じ汀子の次郎左衛門雛かも知れないが、もつと客観的な視点で詠まれている。雛の持ち主を想像するが、雛には持ち主の魂が宿るのかも知れない。季題を通して、悌が目の前に迫ってくるようだ。(廣太郎)

汀子忌の今日祈ること誓ふこと 大阪 酒井湧水

二月二十七日、稲畑汀子の忌日である。昭和六年高濱年尾の次女として横浜に生まれる。小林聖心女子学院に通う小学校時代より、祖父・高濱虚子、父・年尾について俳句を学ぶ。高等学校卒業後、昭和二十四年に本格的に俳句に取り組むようになる。昭和五十四年、父・年尾の死去により「ホトトギス」の主宰を引き継ぐ。昭和五十七年より朝日俳壇選者、昭和六十二年には日本伝統俳句協会を設立。その他、野分会を立ち上げ、若い俳人の育成に情熱を注いだ。

汀子先生は「花鳥諷詠」を作句理念として多くの優れた作品づくりを示されただけでなく、多くの俳人の育成に心血を注がれた。令和四年二月二十七日、午後四時四十八分に病没。

さて掲句、祈ることとは、帰天された汀子先生の安らかなるご冥福をお祈りされているのである。そして、「誓ふこと」とは、

先生が私どもに訓え諭された多くのことを、心に刻み、それに少しでも近づぐことに、日々精進することを誓っておられるのであろう。(とほ歩)

汀子忌に対する思い入れは、人様々であるが、葬儀のミサを司つて下さり、何よりも汀子臨終の後逸早く駆けつけて下さった方である。聖職者としても汀子の帰天に対して祈り、そして俳人として誓う、心持が尊く伝わってくる。(廣太郎)

点描に始まる庭の春浅し 雛ヶ崎 今橋真理子

浅春の庭にちらほらと色が見え始めた。下萌えやいぬふぐりなどが少しずつ庭を彩っているのだ。雨に濡れた黒土のキャンパスに点描のように広がる明るい色彩に心を置く作者である。

(陶句郎)

春になると、未だ寒さも残っている時期ではあるが、庭を見てみると色々な芽が萌え出てきたりするのを目の当たりにするだろう。それが点描画のように広がってくるのを見た作者である。生命の息吹の喜びが感じられる。(廣太郎)